

研究

看護学生における定期歯科健診についての意識調査

佐藤 公子

〔論文要旨〕

20歳代の看護学生28名を対象として学生の定期歯科健診に対する意識と学生からみた保護者の歯科保健行動を調査した。この結果から、保護者の小児期における口腔保健に対する関わりが定期歯科健診に与える影響および定期歯科健診を定着させる方法を検討し、以下のような結果を得た。

1. 学生は口腔の臨床症状が軽度であると重篤にならない限り、直接生命を脅かさないで歯科受診をしない傾向が示された。
2. 学生の定期歯科健診で適切と考えられる受診期間は半年くらい、所要時間は30分くらい、内容は齲蝕の有無などの健診に対する希望が多かった。
3. 保護者は歯の健康に高い関心を持っていたが、定期歯科健診と関連性が認められなかった。このことから、保護者や学生には定期歯科健診が口腔の健康維持に有効という認識が低いことや定期歯科健診の習慣が定着していないことが推測された。
4. 定期歯科健診の実施形態を個人のライフスタイルや期待に適合した内容とし、小児期から継続した口腔管理が受けられるよう支援していく必要がある。

Key words：定期歯科健診，歯科保健行動，アンケート

I. はじめに

歯科保健対策は、齲蝕予防対策として乳幼児の歯科健康診査・保健指導が行われてきた結果、着実に一人平均齲蝕数は減少傾向を示している¹⁾。これらの乳幼児齲蝕の減少の要因としては、健診の充実、保護者の歯科保健意識の向上や食生活習慣への関心の高まりが考えられる。

一方1983年以降、従来の幼児を中心とした齲蝕予防から成人と高齢者に対する歯周疾患に重点が置かれるようになり、包括性や継続的な定期歯科健診や予防処置が歯科保健対策として重視されるようになってきた。また、2010年を目指した健康づくり運動の「健康日本21」では、「定期的に歯石除去や歯面清掃を受けているものの

割合が30%以上」、「定期的に歯科健診を受けているものの割合が30%以上」と目標が設置され、定期歯科健診の普及を図り、生涯を通じての歯の健康づくりへの取り組みが行われている¹⁾。

定期歯科健診は、口腔内の健康と関連が認められ、疾病予防の効果が高いとの報告がされている²⁻⁴⁾。また、定期歯科健診は、歯科的課題を早期発見し、歯石除去や歯面清掃などの第一次予防を行い健康な口腔を維持することや受診者の歯科保健意識・行動の向上のため重要と考えられる。このため、小児期から定期歯科健診への関心を高め、より効果的な口腔管理を習慣化させていくことが成人期、老年期を通した歯の健康づくりのために重要なことと考える。

そこで、本調査では、20歳代の看護学生の定

A Questionnaire Survey on consciousness about Routine Dental Health Examinations
for the Students of Nurse

Kimiko SATO

県立広島大学（研究職/歯科医師）

別刷請求先：佐藤公子 県立広島大学 〒723-0053 広島県三原市学園町1番地の1

Tel：0848-60-1120

〔2019〕

受付 08. 2. 12

採用 08. 5. 13

期歯科健診に対する意識と学生から捉えた保護者の歯科保健行動を調査し、保護者の小児期からの口腔保健に対する関わりが定期歯科健診に与える影響を考慮し、健診を定着させる方法の検討を行った。

II. 調査方法

1. 対象と方法

1) 対象者

調査対象は、2007年4月に入学したA看護専門学校の学生32名（平均年齢19.8歳、19歳～25歳 女性24名 男性8名）のうち、研究の主旨に同意した28名（有効回答率87.5%）を分析対象とした。調査期間は、2008年1月～2008年2月の1か月間であった。A看護専門学校では、病理学、基礎看護学の講義、演習を利用し看護学生に対して、定期歯科健診の必要性、規則正しい生活習慣や食習慣指導、継続的な歯科保健管理の重要性について説明を行った。調査方法は、無記名記入式アンケートとし、終了後ただちに回収した。

2) 質問紙の内容

「定期歯科健診に対する意識調査」では、学生健康に対する関心、口腔のQOL、生活習慣、定期健診の実施状況、学生が捉えた保護者の歯科保健行動を調査項目とした（表1）。回答は「非常に当てはまる」、「かなり当てはまる」、「どちらともいえない」、「少し当てはまる」、「全く当てはまらない」の5件法で行った。

2. 分析方法

「定期歯科健診に対する意識調査」では、学生健康に対する関心、口腔のQOL、生活習慣、定期健診の実施状況、学生が捉えた保護者の歯科保健行動を集計した。次に、定期歯科健診と学生健康に対する関心、口腔のQOL、生活習慣、学生が捉えた保護者の歯科保健行動の関係の分析には、Pearsonの積率相関係数を用いた。解析は、SPSS14.0J for windows.を使用した。統計学的有意水準は $p < 0.05$ とした。

3. 倫理的配慮

調査協力は任意であること、個人情報調査目的以外には使用しないことを説明し、同意者

のみから協力を求めた。なお、調査終了後に調査結果を学生に提示した。

III. 結果

健康への関心としては、「健康に気をつけて毎日を過ごしている」に「非常に当てはまる」と回答した学生が21.4%、「自分の口腔に気をつけている」に「非常に当てはまる」と回答した学生は17.9%、「少し当てはまる」と答えた学生が32.1%であった。看護学生の口腔のQOLは、「歯肉出血」が21.4%で最も多く、次いで「齲蝕」、「口臭が気になる」、「あごの痛み」が17.9%であった。生活習慣では、「栄養のバランスに全く気をつけていない」学生は最も少なく14.3%で、「週に1回以上運動」を行っていない学生が46.4%、続いて「睡眠を7時間以上」とっていない学生が35.7%であった（表1）。

1. 定期健診の実施状態と意識

「治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う」という意識を学生の全員が持っていたが、実際に定期歯科健診を受けている学生は7.1%であった。また、21.4%の学生が「歯の治療は痛くなってから行く」と回答した（表1）。

定期歯科健診で適当と考える受診期間は、「半年ぐらい」が40.7%と最も多く、「1か月くらい」が14.8%で最も低かった。適当と考える所要時間は「30分以内」が53.6%と最も多く、次に「30～45分以内」が21.4%であった。適切と考える通知方法は「はがきで通知」が44.4%と最も高い数値を示した（図1～3）。

定期歯科健診に期待することは、「齲蝕の有無などの健診」が50.0%で最も多く、次に「齲蝕予防」、「歯周疾患予防」が39.3%で「食生活指導」が7.1%で最も低かった（図4）。定期歯科健診にいけない理由としては、「時間がない」、「齲蝕や歯周疾患などの症状が現れないので気にならない」、「面倒である」が主な理由であった（表2）。

2. 保護者の小児期からの口腔保健に関する関わり

「以前、小中高校で歯磨き指導を受けた」者は、46.4%であった。保護者の関わりとしては「子

表1 調査項目と内訳

項 目		1	2	3	4	5
		全く当てはまらない	少し当てはまる	どちらともいえない	かなり当てはまる	非常に当てはまる
関心	1. 健康に気をつけて毎日を過ごしている	2(7.1)	5(17.9)	7(25.0)	8(28.6)	6(21.4)
	2. 自分の口腔に気をつけている	1(3.6)	9(32.1)	3(10.7)	10(35.7)	5(17.9)
	3. 以前, 小中高校で歯磨き指導を受けたことがある	5(17.9)	3(10.7)		7(25.0)	13(46.4)
QOL	4. 口の臭いが気になる	1(3.6)	10(35.7)	2(7.1)	10(35.7)	5(17.9)
	5. 治さなければならぬ齲蝕がある	8(28.6)	6(21.4)	6(21.4)	3(10.7)	5(17.9)
	6. 歯磨きをしていると歯ぐきから血が出る	9(32.1)	11(39.3)	1(3.6)	1(3.6)	6(21.4)
	7. 冷たい水を飲むと歯がしみる	15(53.6)	4(14.3)	4(14.3)	2(7.1)	3(10.7)
	8. 時々あごが痛くなる	15(53.6)	4(14.3)	3(10.7)	1(3.6)	5(17.9)
	9. 食べ物を噛み締めると少し痛いような感じのする歯がある	15(53.6)	10(35.7)	1(3.6)	2(7.1)	
生活習慣	10. 体重のコントロールに気をつけている	6(21.4)	8(28.6)	4(14.3)	6(21.4)	4(14.3)
	11. 栄養のバランスに気をつけている	4(14.3)	6(21.4)	8(28.6)	8(28.6)	2(7.1)
	12. 甘いお菓子を食べている	17(25.0)	5(17.9)	5(17.9)	8(28.6)	3(10.7)
	13. 週に1回以上運動をするよう心がけている	13(46.4)	3(10.7)	6(21.4)	2(7.1)	4(14.3)
	14. 毎日7時間以上睡眠をとっている	10(35.7)	6(21.4)	8(28.6)	4(14.3)	
	15. 生活上ストレスをためないようにしている	6(21.4)	5(17.9)	10(35.7)	3(10.7)	4(14.3)
	16. 食事は, インスタントが多い	8(28.6)	9(32.1)	4(14.3)	2(7.1)	5(17.9)
定期健診	17. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している	16(57.1)	3(10.7)	7(25.0)		2(7.1)
	18. 歯の治療は痛くなってから行く	4(14.3)	12(42.9)	3(10.7)	3(10.7)	6(21.4)
意欲	19. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う		1(3.6)	6(21.4)	13(46.4)	8(28.6)
	20. 今後歯磨きの仕方を指導してもらえたらもっと関心が持てる	1(3.6)		11(39.3)	9(32.1)	7(25.0)
動機付け	21. 歯磨き指導ではめられたら歯磨きを続ける励みになる		4(14.3)	8(28.6)	6(21.4)	10(35.7)
	22. 将来, 自分の子どもに歯磨きをしていきたい		4(14.3)	3(10.7)	8(28.6)	13(46.4)
保護者の関わり	23. 子どもの時, 両親から歯磨きを教えてもらった	2(7.1)	3(10.7)	7(25.0)	8(28.6)	8(28.6)
	24. 子どもの時, 齲蝕にならないように両親が定期的に歯医者に連れて行ってくれた	6(21.4)	5(17.9)	6(21.4)	5(17.9)	6(21.4)
	25. 子どもの時, 保護者から仕上げ磨きをしてもらっていた	4(14.3)	4(14.3)	7(25.0)	5(17.9)	8(28.6)
	26. 両親は歯の健康について関心が高いと思う	5(17.9)	3(10.7)	11(39.3)	3(10.7)	6(21.4)

どもの時、両親から歯磨きを教えてもらった」学生は28.6%, 「子どもの時、定期的に歯科医院を受診した」学生は21.4%, 「仕上げ磨きをしてもらった」学生は28.6%, 保護者の歯科保健意識「両親は歯の健康について関心が高いと思う」と回答した学生は21.4%であった。また、46.4%の学生は「将来、自分の子どもに歯磨きをしていきたい」と考えていた(表1)。

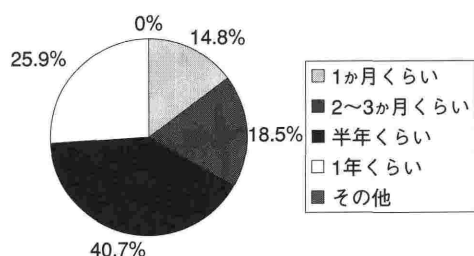


図1 定期歯科健診で適当と考える受診時間

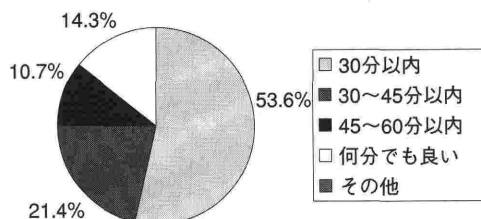


図2 定期歯科健診で適当と考える所要時間

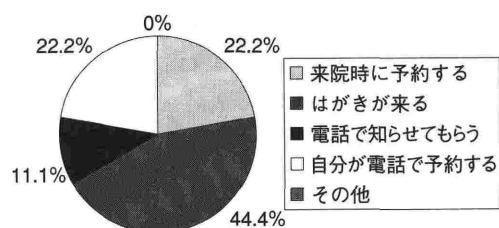


図3 定期歯科健診での適当な通知方法

3. 定期健診と学生の健康に対する関心, 口腔のQOL, 生活習慣, 学生が捉えた保護者の歯科保健行動の関連について

「自分の口腔に気をつけている」学生ほど「治

表2 定期健診についての意識(自由記載)

定期健診に行かない理由		人数
1	行くと何回か通わないといけなくなるから	1
2	今まで行っていた病院が遠い	1
3	あごが痛いそれをみてる病院がわからない	1
4	良い病院がどこかわからない	1
5	時間がないが行こうと思う	1
6	時間がない	4
7	齲蝕, 歯周疾患, 痛みなど症状が現れないと気にならない	3
8	面倒	2
9	学校との時間が合わない	1
10	お金がかかる	1
11	待つのが面倒	1
12	特になし	1
13	歯に興味がない	1
14	齲蝕がないと以前言われたので	1
15	行かないといけないと思いながら忘れてしまう	1
16	いつ定期健診に行っているのかわからないから行っていない	1
定期健診に行っている理由		人数
1	齲蝕になりたくない	1
2	自分の歯の状態を知ることができるから	1
3	齲蝕がひどくなっていないか。きれいかなど	1

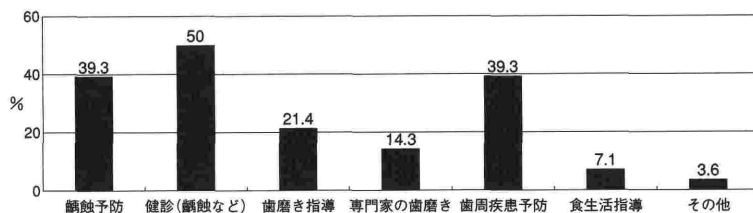


図4 定期歯科健診に期待するもの(重複回答)

療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している」ことが認められた ($r = .569$ $p < 0.01$)。しかし、学生の QOL の状態と「治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している」に有意な相関は認められなかった。「治療よりも口腔の健康のために歯科医院に通院しようと思う」という意欲と実際「治療よりも口腔の健康のために歯科医院に通院している」との間には、 $r = .398$ $p < 0.05$ で有意な相関があった (表 3)。生活習慣では、「食事はインスタント食品が多い」と「治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している」の間に負の相関が認められた ($r = -.403$ $p < 0.05$)。「生活にストレスをためないようにしている」学生は、「体重のコントロール」、「栄養バランスに気をつけている」、「週に 1 回以上の運動」などに気をつけていることが認められた (表 4)。

口腔衛生では、25.0%の学生が「今後、歯磨きの仕方を指導してもらえたらもっと関心がもてる」、35.7%の学生が「歯磨き指導でほめら

れたら歯磨きを続ける励みとなる」と回答したが、「治療よりも口腔の健康のために歯科医院に通院しようと思う」との間に相関は認められなかった。また、「治療よりも口腔の健康のために歯科医院に通院しようと思う」と「両親は歯の健康について関心が高いと思う」、「将来、自分の子どもに歯磨きをしていきたい」の間には有意な相関が認められた。しかし、「治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院へ通院している」と保護者の小児期からの口腔保健に関する関わりとは有意な相関は認められなかった。また、歯の健康について関心が高い両親は、子どもの歯磨き指導、仕上げ磨きを有意に行っていたことが認められた (表 5)。

IV. 考 察

定期的な歯科健診は、歯石除去や歯面清掃などの病因除去としての一次予防の効果と受診者の歯科保健の意識育成、規則正しい生活習慣を身につける重要なものと考え⁵⁾。しかし、1999年度保健福祉動向調査では、過去 1 年間に

表 3 定期健診と学生の関心、QOL の相関係数

定期健診 関心・QOL		17. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している	19. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う
関心	17. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している	1	
	19. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う	.398*	1
	1. 健康に気をつけて毎日過ごしている	.275	.126
	2. 自分の口腔に気をつけている	.569**	.353
	3. 以前磨き方の指導を受けたことがある	.078	.473*
QOL	4. 口の臭いが気になる	.239	.128
	5. 治さなければならない齲蝕がある	.001	-.021
	6. 歯磨きをしていると歯ぐきから血が出る	.263	.075
	7. 冷たい水を飲むと歯がしみる	-.038	.052
	8. 時々あごが痛くなる	.030	.424*
	9. 食べ物をかみ締めると少し痛いような感じのする歯がある	.171	.007

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ Pearson

表4 定期健診と生活習慣の相関係数

定期健診 生活習慣	17. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している	19. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う	10. 体重のコントロールに気をつけている	11. 栄養のバランスに気をつけている	12. 甘いお菓子を食べている	13. 週に1回以上運動をするよう心がけている	14. 毎日7時間以上睡眠をとっている	15. 生活上ストレスをためないようにしている
10. 体重のコントロールに気をつけている	.116	.163	1					
11. 栄養のバランスに気をつけている	.300	.087	.505**	1				
12. 甘いお菓子を食べている	.227	-.102	.037	.285	1			
13. 週に1回以上運動をするよう心がけている	.363	.258	.532**	.496**	.082	1		
14. 毎日7時間以上睡眠をとっている	-.257	-.130	.055	.183	.123	.295	1	
15. 生活上ストレスをためないようにしている	.008	.001	.679**	.394*	-.123	.565**	.417*	1
16. 食事は、インスタントが多い	-.403*	-.163	.150	-.149	.012	-.236	-.074	.024

*p<0.05 **p<0.01 Pearsonの相関係数

表5 学生の捉えた保護者の口腔衛生に対する意識と定期健診の相関係数

定期歯科健診 保護者の口腔衛生に対する意識	17. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している	19. 治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う	20. 今後、歯磨きの仕方を指導してもらえたらもっと関心が持てる	21. 歯磨き指導でほめられたら、歯磨きを続ける励みになる	22. 将来、自分の子どもに歯磨きをしていきたい	23. 子どもの時、両親から歯磨きを教えてもらった	24. 子どもの時、齲蝕にならないように両親が定期的に歯医者に連れて行ってくれた	25. 子どもの時、保護者から仕上げ磨きをしてもらった
20. 今後、歯磨きの仕方を指導してもらえたらもっと関心が持てる	-.020	.136	1					
21. 歯磨き指導でほめられたら、歯磨きを続ける励みになる	.048	.074	.783**	1				
22. 将来、自分の子どもに歯磨きをしていきたい	.347	.535**	.476*	.199	1			
23. 子どもの時、両親から歯磨きを教えてもらった	-.336	-.033	-.179	-.010	-.034	1		
24. 子どもの時、齲蝕にならないように両親が定期的に歯医者に連れて行ってくれた	-.306	.317	.209	.138	.256	.371	1	
25. 子どもの時、保護者から仕上げ磨きをしてもらった	-.369	.055	-.129	-.239	.009	.630**	.446*	1
26. 両親は歯の健康について関心が高いと思う	.000	.451*	.014	-.113	.348	.417*	.651**	.681**

*p<0.05 **p<0.01 Pearsonの相関係数

歯磨き指導を受けたことのある者（15～24歳）18.3%、過去1年間に歯科健診を受けた者（55～64歳）18.6%であり、歯科保健目標値「定期的に歯石除去や歯面清掃を受けているものの割合が30%以上」、「定期的に歯科健診を受けているものの割合が30%以上」に達成していなかった。

一方、従来の小児期における齲蝕予防対策を中心とした歯科保健対策によって乳歯齲蝕の減少や軽症化、永久歯の一人平均齲蝕数が20歳頃まで減少傾向が認められるなど着実に成果が上がっていると考えられる。しかし、本調査で、学生は「口臭」、「治療しなければならない齲蝕がある」、「歯肉からの出血」など何らかの口腔に対する自覚症状を持っていることが明らかとなり、依然として齲蝕と歯周疾患が健康課題と考えられる。

13歳で齲蝕有病者率が90%を越え、55～64歳で歯周病の有病者率が82.5%となるなど歯科疾患の有病状況は齲蝕、歯周病ともに高率を示していたこと、咀嚼能力に直接的な影響を与える歯の喪失状況についても60歳代で半分（14歯）の歯を失い80歳代では約半数の人がすべての歯を喪失している現状は、第一次予防としての定期歯科健診が重要であることを示していると考え^{1,2)}。また、効果的な定期歯科健診の受診勧奨には、対象者の歯科保健意識や生活習慣を把握した指導が必要になると考える。

1. 学生の定期健診の実施状態と意識

学生の定期歯科健診の間隔は、「半年ぐらい」が最も多く、続いて「1年くらい」であった。定期歯科健診の妥当な期間として、齲蝕の発生頻度が高い乳歯列期では1～2か月、混合歯列期では1～4か月が適切で一定期間の規則性を持たせることが重要といわれている^{3,4)}。しかし、小児期と比べ成人期の齲蝕の発生リスクは低いと考えられるので、歯周疾患予防も考慮に入れた健診の間隔を検討していく必要がある。

定期歯科健診における所要時間は、「30分以内」が最も多く、定期歯科健診の継続には時間的な制約、精神的負担を考慮する必要性が示唆された。しかし、受診時間が「何分でも良い」と考えている学生が14.3%いたことから、健診

内容が個人の期待するものであれば、時間がかかったとしても十分理解が得られると推測される。次に、定期歯科健診の通知方法であるが、電話より「はがき」といった通知方法が受診日の忘れを防止し、受診勧奨の効果が高いと考えられる。また、約20%の学生が主体的に「来院時に予約する」、「自分が電話で予約する」と回答していたことから、定期歯科健診に対する期待や意識の高さが推測される。このため、病院から定期健診のはがきなどによる通知は、定期健診に対する意識を高め、中断しないで持続的に受けるため有効であると考えられる。

定期歯科健診の内容としては、「健診」、「齲蝕予防」、「歯周疾患予防」といった予防的処置への期待が高く、「歯磨き指導」、「専門家の歯磨き」、「食生活指導」については低値であった。しかし、本調査において、加工食品などインスタント類をよく食事に利用する学生は、定期歯科健診を受診する傾向が低いこと、生活上ストレスをためないよう気をつけている学生ほど「体重コントロール」、「栄養バランス」、「週に1回以上の運動」といったリズムのある生活をしていることが明らかになった。口腔の健康は、歯磨きなどの歯科保健行動や望ましい食生活習慣、ストレスの軽減により維持できるものである。しかし、学生は、口腔の健康にセルフケアである歯磨きやバランスの取れた食生活を重要と捉えていないことが推測されるため、今後歯磨き方法や食生活の重要性について指導していく必要があると考える。

2. 定期健診と学生の健康に対する関心、口腔のQOL、生活習慣、学生が捉えた保護者の歯科保健行動の関連について

すべての学生が歯科疾患とそれに付随する不快症状があると答え歯科的な問題を抱えていたにもかかわらず、学生の口腔のQOLの状態と歯科受診の間に有意な相関は認められなかった。その理由として、「時間的な余裕がない」といった学生のライフスタイルにあわない診療形態や「齲蝕や歯周疾患、痛みなどの症状が現れないと気にならない」という歯科疾患に対する関心の低さが挙げられる。また、学生が自分で時間を調節したり、健康を管理するといった

自己管理能力が低いことも考えられる。河村らは、全国の成人就業者77,440人（平均年齢39.7歳）を対象とした質問調査を行い、「ムシ歯ではあまり病気になった気がしない」という設問に対して「気がしない」21.3%,「あまりしない」32.2%といった回答であったと報告した⁶⁾。このことから、学生は「治さなければならない齲蝕がある」、「歯肉出血がある」と感じていても臨床症状が軽度で重篤にならないと直接生命を脅かさないで受診しないのではないかと考えられる。

約2割の学生が小児期に保護者が歯科保健行動である「子どもの時、両親から歯磨きを教えてもらった」、「子どもの時、定期的に歯科医院を受診した」、「仕上げ磨きをしてもらった」、「両親は歯の健康について関心が高いと思う」と回答した。これは、岡山県の2005年の母子保健で「仕上げ磨き」をしている保護者が1歳6か月児健診時52.6%, 3歳児健康診査では57.1%という報告と比較すると低率であったが、「かなり当てはまる」を含めると約5割程度の保護者が小児期に仕上げ磨きを行っていたことになりほぼ同様の値であった⁷⁾。乳歯齲蝕と永久歯齲蝕には、強い関連が認められることや乳幼児期は、口腔清掃や食習慣などの基本的歯科保健習慣を身につける時期であるので半数の保護者が「仕上げ磨き」を行っているのは非常に重要と考えられる^{8,9)}。Blinkhornは、予防知識の豊富な母親は「歯磨き習慣を強化する」目的で、子どもを定期健診に連れて行ったり、仕上げ磨きを行うと述べていた¹⁰⁾。このことから、母親の日常の歯科保健行動が、今後の子どもの口腔衛生や生活習慣を形成するうえで重要なポイントであると考えられ、早期から母親への啓蒙といった取り組みが必要であろう。

本調査では、定期歯科健診と保護者の小児期からの口腔保健に関する関わりとは有意な相関は認められなかったが、歯の健康について関心が高い保護者は、積極的に子どもの歯磨き指導、仕上げ磨きを行っていた。保護者は歯の健康に高い関心を持っていたが、定期歯科健診と関連性が認められなかったのは、保護者にとって健診が口腔の健康維持に有効という認識が低いことや健診が習慣化していないことが考えられる

(表5)。このことから、定期歯科健診の実施形態を個人のライフスタイルや期待に適合した内容とし、小児期から継続した口腔管理が受けやすいよう支援していく必要があると考える。

3. 定期健診の普及についての課題

「治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院しようと思う」と「治療よりも口腔の健康を守るために歯科医院に通院している」の間には正の相関関係が認められ、口腔衛生に対する関心の高さが定期歯科健診の受診行動に影響を及ぼしていると推測される。原岡は「態度は、学習を通じて形成される反応の準備状態である。態度は一定の対象または状況に関連して形成される。態度は持続的でいったん形成されると長期間にわたって維持される反応傾向である」と述べていた¹¹⁾。定期健診を受診するといった行動は、知識や生育環境と関連性があるため変容することは容易ではないと思われる。しかし、QOLの基盤となる歯と口腔の健康保持、増進には、早期からの継続した定期歯科健診が必要であるため習慣づけや啓発活動、定期健診を受けやすい環境整備を行い歯科保健意識の育成を図ることが大切であると考ええる。

今回の研究における調査対象は28名と少数であったため、今後は対象数の増加や他の要因の関連を比較検討した分析をしていきたい。

文 献

- 1) 厚生省の指標。国民衛生の動向 2007; 54: 81-88, 118-124.
- 2) 岡崎好秀, 東 知弘, 中村由貴子, 他. 障害児施設における定期健診の効果について—一初診時と12歳時の齲蝕罹患状態の関係—. 障歯誌 1999; 20: 48-58.
- 3) 岡崎好秀, 酒井美智代, 東 知弘, 他. 小児歯科における定期健診の必要性に関する研究, 第2報 定期健診が乳歯修復物の機能期間に与える影響. 小児歯誌 2001; 39: 206-214.
- 4) 松本弘紀, 角田初恵, 原田利佳子他. 本学小児歯科における定期診査についての意識調査. 小児歯誌 2006; 44: 409-415.
- 5) 濱本宣興. 「健康日本21」と予防医学対策, 予防歯科・成功への道 ライフステージから捉えた

アプローチ, デンタルダイヤモンド社, 東京 : 2000 : 170-173.

- 6) 河村 誠, 皆川芳弘, 川村彰子, 他. 成人の歯科保健行動について—デンタルチェッカーによる77,000人の集計結果—. 口腔衛生会誌 1997 ; 47 : 139-150.
- 7) 岡山県保健福祉部健康対策課 岡山県の母子保健 (平成17年度版)
- 8) 土田和範, 河村 誠, 北本淳司, 他. 母親の口腔状態ならびに養育態度と乳歯齲蝕との関連について 広島大学歯学部紀要. 1992 ; 24 : 197-204.
- 9) 笹原妃佐子, 河村 誠, 宮城昌治他. 母親の歯科保健行動ならびに口腔内状態と三歳児健康診査受診状況の関連について. 日本公衆衛生誌 1999 ; 45 : 1059-1067.
- 10) Blinkhorn AS. Factors influencing the transmission of the tooth brushing routine by mothers to their pre-school children. Journal of Dentistry 1980 ; 8 : 307-311.
- 11) 原岡一馬. 態度変容の社会心理学. 東京 : 金子書房, 1970.

[Summary]

We surveyed 28 nursing students in their 20s to understand their consciousness about routine dental health examinations and to determine the dental health care behavior of their parents from their perspective. Based on the survey study, we examined how the parents' commitment to the childhood

oral health of their children affected the children's attitude toward routine dental health examinations and how the examinations could be established. We obtained the following result :

1. The students tended not to visit the dentist unless their oral condition was serious, considering that mild oral condition was not life-threatening.
2. Many students considered that the appropriate interval for routine dental health examinations was about 6 months, the appropriate time was about 30 minutes, and the appropriate examination content was to check cavities.
3. Their parents seemed highly concerned about the children's dental health, although we could not determine its relevance to the children's attitude toward routine dental health examinations. This indicated that the parents and students were less aware of the effectiveness of routine dental health examinations for oral health maintenance and that routine dental health examinations were not well established among them.
4. It is necessary to tailor the method of conducting routine dental health examinations to individual lifestyle or expectation and to support the students to allow them to have continuous oral health care.

[Key words]

routine dental health examinations, dental health care behavior, questionnaire